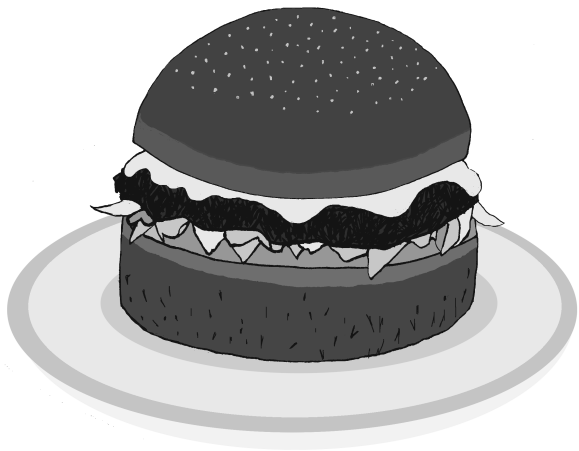


6
子供の頃の昨日のつづき



これは自分の持つて生まれた許容量によるものかもしれないけれど、ひとつの出来事が他の出来事を孕み、さらには、そこからさかのぼって別の何ごとかに思いを馳せていくと、頭の中がいつぱいになるといふより、空っぽになってしまったかのようにうまく作動しない。

たとえば、〈キツチンあおい〉のロールキャベツが驚くばかりにおいしかったのは間違いない。が、それ以上にミユキさんが話してくれた「アキヤマ君」のことは、彼が——まだ少年だったアキヤマ君が——僕に似ていたということもあって、突然、まぶしい光を見てしまったときのような強い印象をのこした。

「でも」

と僕は妹に打ち明けた。

「何？」

と妹は僕の表情を上目づかいで窺うかがっている。

少しばかり情けない思いになった。頭の中がうまく作動しなくなると、そのたび妹と話をして、彼女に整理してもらおうというのはいかがなものだろう。なにしろ、へキツチンあおい〜に出向く前に話したばかりなのだ。

とはいえ、事前に相談をしたのだから、その結果、どうなったのかを報告するのはおかしなことではない。内心、自分にそんな言い訳をし、

「でも」

と僕は繰り返した。

「何?」

と妹も上目づかいのまま繰り返す。

「でも、正直言つて、いちばん印象にのこったのはロールキャベツのおいしさでもアキヤマ君のこともなくて——」

「何なの?」

「ハンバーガー」

「ハンバーガー?」

「土曜日だけのね。へ土曜日のハンバーガー」。店

内に貼り紙がしてあって、土曜日限定のメニュー
みたいだった。それがすごく気になって——」

「本当に？」

妹は、信じられない、というふうに首を振った。
それはそうかもしれない。ロールキャベツの味は
ともかくとして、アキヤマ君の話は、右から左へ
聞き流せるようなものではない。妹も、「そうか、
そうなのね」と神妙な顔になり、

「似てたんだ、その子に」

と僕の顔を——目や鼻や耳や口をひとつひとつ
点検するように吟味していた。

そうなのだ。

ようするに、ミユキさんが「会いたい」という
「絵の中の人」は、僕ではなく、僕によく似た
「アキヤマ君と呼ばれている少年」だった。

より正確な言葉に置き換えるなら、「少年のま
まいなくなってしまうアキヤマ君」とでも言え
ばいいのか。

「子供の頃にね——」

ミユキさんは目尻に涙を溜め^たているのに、言葉づかひも話し方もじつに気さくで、自分でも、それに気づいたらしい。

「すみません。はじめてお会いしているのに、そんな気がしなくて——わたし、アキヤマ君にだって、もうずいぶん長いこと会っていないのに、こうしてお話ししていると、子供の頃の昨日のつづきみたいな感じがするんです」

そう言つて、かすかに笑みを浮かべた。

そのあいだ中、ミユキさんは僕の目を——あるいは、目の奥にある何かを見ていて、こちらとしては、非常に恥ずかしいことなのだけれど、話を聞くにつれ、この人が見つけ出そうとしているのは僕ではないのだから、僕が恥ずかしがることはないのだと開き直っていた。

でなければ、あんなに見つめられたら、しどろもどろになってしまう。そうならなかったのは、これは単なる人違いであつて、自分には関わりのないことだと理解したからだ。

ただ、いざそういう立場に置かれてみると、美

術館の金沢さんから話を聞いて、妹に相談し、あの急な坂をおりてここまで足早にやってきた自分の思いが、行き場を失ってどうしていいか分からなくなつた。

「子供の頃に、いなくなつてしまつたんです」

ミユキさんはアキヤマ君のことを、冷静かつ淀みない話しぶりで説明してくれた。

妹の頭の上も大したものだと思つていたが、このミユキさんという人は、そのたたずまいからして頭の回転が早いような気がした。こちらをじつと見つめる大きな瞳に力があり、それでいて、どこか遠くを見ているような透明な輝きを持っている。その印象が、背筋をぴんと伸ばして立っている凜とした感じに見合つていた。

「子供といつても、もう中学生でしたが、水の事故で遭難して行方不明になつてしまつたんです。友達になつて、仲良くなつたばかりで、彼には訊きたいことがいっぱいあったのに、ふつといなくなつてしまつて。どう言つたらいいのか——物語

の途中で、急に本のページが真っ白になって、その先が読めなくなっちゃったような。それが本当にもどかしくて、ずっと帰ってくるのを待っていません。もういちど会って、話をしたい。あの声を聞きたいって」

（さて、どうなんだろう？）

僕のこの声もまた、アキヤマ君の声と似ているのだろうか。

中学生だったら、すでに声変わりも済ませていただろう。顔が似ているということは、骨格も似ていて、声まで似るということはないんだろうか。「いつのまにか、時間が流れてしまって、そうか、もう彼には会えないんだなって——分かってはいるんです。でも、いつも頭の隅に彼は居て、それであるとき、あの美術館へ何の気なしに展覧会を観^みに行^きって、出会^あってしまったんです。あの絵に」

ミユキさんはそう言って視線を外し、あの絵が食堂の壁に飾られているかのように、ただ白いばかりの壁を眺めていた。

「曾^そ我^がさんはあのとき、おいくつだったんですか」

と視線をこちらに戻し、曾我さん、と急に言われて、そうだった、まだ自分は名乗っていなかった、と気がついた。ミユキさんは金沢さんから事情を聞いているはずだから、僕に会うまでもなく、自分の会いたい人ではないとすでに承知しているはず。あの「絵の中の人」が、いまはもう三十二歳になった曾我^{てっお}哲生という名の男であることも――。

「絵のモデルをしたのは十七歳のときです」

そう答えると、

「そうでしたか。十七歳ですか。ちょうどそんな感じがしたんです。最後に会ったときより少しだけ成長していて、大人びた感じになったアキヤマ君そのものだなんて。わたし、あの絵を見て勝手にそう思ってしまつて。そのうえ、絵を描いた人が不明だというのも気になって――たまたま美術館がアルバイトを募集していたんです。それで、その勢いのまま働くことになりました。そこに居

れば、いずれ何か手がかりのようなものが分かるんじゃないかと思つて——」

ミユキさんが言うには、もし、この食堂を父親から引き継ぐ話がなかつたら、いまもたぶん、あの美術館で働いていたとのこと。

「そこへ曾我さんが、突然、あらわれたら、きつとわたし、声をあげて泣いていたと思います。帰ってくるはずのないアキヤマ君が帰ってきたつて——」

*

「そういうことだったのね」

妹は僕の話聞いてしきりに頷うなずいていたが、それはそうとして、じつのところハンバーガーの貼り紙がどうにも気になつて——と告白したところ、神妙な様子から一転して呆あきれ顔になつた。

「そういうところ、お父さんによく似てるのよ」

「そういうところって？」

「一緒にテレビとか映画とか観ていても、内容は

ひとつも頭に入っていないみたいなの。バックに流れてる音楽のことばかり気にしていて、いい曲だな、とか、いまの転調は気が利いてるとか」

(ああ)

たしかにそれは自分もそうだ。

テレビでCMが流れていると、耳ばかり働いて、何を宣伝していたのか肝心なところが抜け落ちる。でも、それとこれとは違うのだと言いたい。

僕はすっかりユキさんの話を聞いて、どんなことなのか理解したつもりだし、ロールキャベツの味だって、自分なりにリポートできる。

これ見よがしの味ではないから、食べるなり、「おいしい」と口をつけて出るわけではない。でも、味わうほどに、腹の底からうまさ染みわたる、腹の底から色々なことが思い出される。

それは、「懐かしい」という安易な言葉で表現するのがはばか憚られるもので、

(なんだろうな、この味は知っているような気がするし、はじめてのような気がする)

と口に運ぶたび、頭ではなく舌が喜びながら考えた。

あっさりしているけれどコクがある、というのはよく耳にするが、そうした既存の表現に当てはめていくのも、実際のおいしさを狭めているような気がする。

こうしたことは、〈バーガー・ログ〉を書くようになって気づいたことで、本当においしいと感じたときは、既存の言葉を駆使するだけでは足りないのである。

「まあ、でも、仕方ないよね」

と急に妹は夢から覚めたような顔になった。

「兄さんは、単なるそっくりさんだったんだから、他人の思い出話より、ハンバーガーが食べたいって思っちゃっても仕方ないよ」

「うん」

と僕はなんだか腑ふに落ちない。

「まあ、それはそうなんだけど——」

そもそも、「ロールキャベツ」と「アキヤマ

君」と「土曜日のハンバーガー」に順列を与える方がおかしい。僕が言いたかったのは、その三つが同時に押し寄せてきて、頭の中がいっぱいになって、空っぽになって、妹に整理してもらいたかった、ということなのだ。

*

ただ、土曜日が待ち遠しかったのは本当だ。

これは正直な気持ち——。

順列の問題ではなく、ロールキャベツを食べ終えて〈キッチンあおい〉を出るとき、ミユキさんではないもうひとりの女性——そのひとのことをミユキさんが「サユリさん」と呼んでいた——が、ハンバーガーの貼り紙を見なおした僕に、

「ぜひ、どうぞ。土曜日に」

と声をかけてくれたのだ。

「ええ」

と僕は反射的に応え、

「土曜日にまた来ます」

と笑みまで浮かべてしまった。

「一期一会」というのは、こういうときにこそ使うべきではないか。

なにより、ロールキャベツがあれほどおいしかったのだから、きつと、ハンバーガーも特筆すべきものに違いない。そうした思いの底には、そろそろ〈バーガー・ログ〉を更新しなくては、という魂胆もあるにはあったが、どうせ更新するならば、特筆に値するものがない。

いや、そうした理屈を抜きにしても、おいしいだろうという予感があった。

そして、その予感がかならず当たるだろうという予感もあった。

*

「いらっしやいませ」と迎え入れてくれたのは、そのサユリさんと呼ばれていた彼女で、

「本当に来てくれたんですね」

と言って、壁の貼り紙を指差した。

「ええ、じつは、ハンバーガーが何よりの好物で、これはなんとしてもいただきたいと思っただけです」

そう伝えると、サユリさんは「光荣です」と軽く頭をさげた。どうやら、ロールキャベツはミユキさんがつくり、ハンバーガーはサユリさんが担当しているらしい。

というのも、このあいだと違って、サユリさんはミユキさんにオーダーを伝えるのではなく、自ら厨房ちゆうぼうに入つて、それきり戻つてこなかったからだ。かわりに、ミユキさんが「いらっしやいませ」とあらわれ、

「あの——」

と何か言いづらそうにしている。

「あの——このあいだは、わたし、ずいぶんと喋しゃべりすぎてしまつて、あとで思い出して、変なこと言わなかったかなつて悶々もんもんとしていたんです。でも、曾我さんにお会いできたことは本当に嬉うれしくて、あんまり嬉しかったから、仲間に話したんです」

仲間、という言葉をひさしぶりに聞いたような気がして、思わず小さな声で、「仲間ですか」とつぶやいたら、ミユキさんはそれを聞き逃さず、「あ、あの——仲間といっても、単に子供の頃から知っているってだけで、しいて言うとな、わたしと同じで、アキヤマ君に『また会いたい』と思っている奴やつらなんです」

今度は、唐突な「奴ら」に、つい反応してしまい、それにもまたミユキさんが気づいて、

「あ、奴らっていうのは男子だからです。アキヤマ君と同級生だった子たちで——子たちっていうか、もう、くたびれかけたおじさんですけどね」

そう言つて、ミユキさんは「あはは」と豪快に笑つてみせた。

「彼らも曾我さんに会つてみたい、と言つていました。もしよかったら、今度、会つてやってくださいませんか——つて、迷惑な話ですよ。すみません」

「いいえ」

と僕はいつもより声を大きくして応えた。

「僕としては、本物じゃなくてごめんなさいとしか言えないんですが——偽者でもよろしければ」

「偽者だなんて、とんでもない」

ミユキさんは顔の前で強く手を振った。

「どうも、うまく言えないんですけど、あの絵を見たときにも思ったんです。お顔のつくりがそっくりとか、そういうことだけじゃなくて——どう言ったらいいんでしょう、こうしてお話をしていると、あの頃の時間がそのまま戻ってくるような気がするんです」

じつを言うと、それは僕の中にも芽生えている感情だった。ずっと前から、この町やこの場所の空気を知っていたかのように、そればかりか、ミユキさんという人に、初めて会ったとは思えないほど親しみを覚えていた。

まさか、そんなことはないのだけれど、僕は子供の頃、じつはアキヤマ君で、事故にあって記憶を失ってしまい、何も覚えていないけれど、昔、会ったことのある人や、昔、住んでいた場所に触れると、自然とおだやかな気持ちになる——そんな

な気さえし始めていた。

でも、僕はまた妹に告白しなければならぬ。

そうした思いを抱き、言いようのない感情で胸がいっぱいになっているところへ、サユリさんがつくりたてのハンバーガーを——〈土曜日のハンバーガー〉をトレイに載せてテーブルに運んできた。

もう一度、言おう。

「でも」と僕は妹に伝えなければならない。

ミユキさんの話を聞いて、胸にあふれる思いがあったのだけれど、それを凌駕りょうがするほどの素晴らしいハンバーガーを食べることになった。

完璧かんぺき、と言ってもいい。

それは自分の中で常にベスト・ワンを保っていた、あの〈チャーリー〉のチーズ・バーガーを軽く超えていた。

「なるほどね」

と妹は言うだろう。

「兄さんは、どんなものよりも、ハンバーガーが一番なのね」

そのとおり。僕はそんな奴だ。それで構わない。いまさら、妹の前でとりつくろっても仕方がない。

でも——。

「でも」である。

さらなる、「でも」が、ハンバーガーに舌鼓を打った直後に訪れた。

「おいしい」

と声を上げ、何気なく——本当に何気なく食堂の壁に目をやり、へ土曜日のハンバーガーを告知した貼り紙を、いま一度、確かめると、もうひとつ別の貼り紙がその隣に貼られているのに気がついた。

楽団員募集！

やや大きめの文字でそう謳い、そのあとにふた回りほど小さな字で、

クラリネットを吹ける人、探しています。

われこそは、と思われる方、

連絡をお待ちしています。

鯨オーケストラ・岡

とあった。